題にされる気配がないためだった．約20名の研究者がそれぞれの立場から見解を述べているが，これらはわずか二ケ月の間に執筆編集刊行されたもので，彼らに代表される有識者の危機感の深刻さを象徴している．生物学者が単純に自然保護を唱えているだけでは足らず，社会的政治的発言をせねばならぬ時代となったこと，そしてそういう発言をするに足りる情報蓄積がなされたことを示している．表題だけを要約して並べると次のとおり．気候変動と生物多様性の未来（座談会），温暖化と生物多様性，生物多様性の危機，CO_2排出の長期見通し，生態系と炭素循環，温暖化に伴う気候変化予測，縄文海進，高山植物群落はどのように変化するか，危機的状況にある水草の世界，海の生物たちはどうなる，魚類にとっての温暖化，ウミガメへの影響，昆虫へのインパクト，高層湿原の高山蛾，森林害虫，鳥に何が起きるか，ナキウサギは温暖化に耐えられるか，人獣共通感染症の恐怖（対談），感染症の増加と温暖化，生物多様性を視点に地球温暖化を考える． （金井弘夫）

□山口裕文（編著）：**雑草の自然史** 234 pp. 1997. 北海道大学図書刊行会．¥3,000

雑草や帰化植物のような，どこにでも生え駆除の厄介な植物についての，専門研究者16名による研究成果の紹介である．雑草フロラの成立，適応力を解明する，生活史戦略をさぐるの3部より成り，副題にあるように‘たくましさの生態学’を解説する．とりあげられた植物はタカサブロウ，タイヌビエ，ハマスゲ，ナズナ，チガヤ，ヤエムグラ，ヨメナ，オオバコ，セイヨウタンポポ，セイタカアワダチソウ，トピックとしては雑草の起源，薬剤耐性，生育型，発芽生理，散布法，他感作用，遺伝性とさまざまである．一般むきにはちょっとむづかしいが，一応の下地のある読者には，とくに生理的な面からの説明に得るところが多いだろう．巻末に各種文献から抽出した，わが国の帰化植物105科1273種類の一覧表がある． （金井弘夫）

□ジョンストン V. R.，西口親雄（訳）：**セコイアの森** 295 pp. 八坂書房．¥2,800.

原書名は California Forests and Woodlands である．目次を見ると，針葉樹の見分け方とか下部アルプス帯の森林とか，アカモミ林とロッジポールマツ林とか生態系の名前が並んでいるが，植物生態学の本ではない．それらの生態系に生活する生き物すべてにわたる，自然観察の書である．だから植物はもとより，哺乳動物，鳥，昆虫，きのことなんでも登場し，お互いの生活のかかわり合いが述べられている．そしてかれらの生活を守るための法律や規制の方法まで記されている．カリフルニアトチノキの生活から種子の毒性におよび，インデアンによって魚毒に利用されたのち食用となること，この木の下には生育する植物は少ないが，カリフォルニアツタウルシはよく見られること．ツタウルシのかぶれの元はウルシオールだが，シカ，ウシ，ウマは食餌とすること，果実は多くの鳥の食料となるが，キツツキ類もその中に入ること．キキツツキの主な食料は昆虫で，どんな姿勢で採食するか…という具合に，あとからあとから話がひろがってゆく．ともすると混沌としてしまうストーリーが，要領よくまとめられている．口絵のカラー写真以外は，サイモン C. J. による線画で，親しみ易い印象を与える．原著者はカレッジの教師を永く勤めた人で，森林昆虫専攻の訳者は著者の観察眼の正確さにひかれたという．日本でもこういう広い実地の経験と知識のある人による，案内書がほしいものだ． （金井弘夫）

□小山鐵夫：**植物園の話** 205 pp. 1997. アボック社．¥1,286.

植物園というと観光行楽施設というのがわが国の一般的な印象で，マスコミに登場するのはきれいな，珍しい植物ばかり，その真の役割はよく理解されていない．単なる教員ローテーションのポストとしてしか利用していないような人員配置の植物園もみられる．30年近くをニューヨーク植物園で研究・教育・運営にかかわり，世界各地の植物園になじみのある著者が，自然保護，遺伝子資源，植物情報などの今日的な植物園の役割について語ったものである．まず，総合植物園，特殊植物園，植物公園の区別から始まり，ニューヨーク植物園を例として，実際の運営のとくに裏方の仕事が紹介される．次に植物園の本

質的な仕事である，植物資料収集活動の目的と実際が語られ，収集資料の標本化，生植物の栽培保存管理について，具体的に記されている．栽培部門，標本部門，研究教育部門，事務部門と分化した植物園が，互いに連携して事業を行うスケールの大きさには，わが国の現状と引き比べてため息が出る．本書の中頃では，そういう基礎に立った植物園の様々な活動が紹介され，そして後の1／3では，世界の植物園，とくにそのコレクションや活動の特色が，実際に目にした印象をもとにいきいきと綴られている．本書は朝日園芸百科の連載記事をまとめ直したものだが，植物園というハコ物は比較的容易に造れても，その運用の理念の確立とそれを支える確固とした財政基盤がなければ，自然と人間の共存に役立つ植物園は成り立たないという，著者の主張を裏付けるものとなっている． （金井弘夫）

□大場秀章：**バラの誕生** 249 pp. 1997. 中公新書．￥760.

古来，バラは園芸植物の筆頭の地位を占めて来た．そういう園芸バラ作出の背景にある，科学と芸術のかかわり合いを探ろうというのが，著者のもくろみである．まず，園芸バラの発達は1867年を境として二期に分かれるという定説にもとずき，オールドガーデンローズの歴史が古典と最近の研究成果を元に語られる．そして東洋からのコウシンバラの導入をきっかけとする，モダーンガーデンローズの爆発的発展を要約する．後半はたくさんのバラの花譜について，著者の鑑識眼を通した紹介に始まり，ヨーロッパへ導入されたバラの原種の再発見のはなし，著者が訪れた中国やヒマラヤのバラのはなしから，世界各地のバラ，日本のバラと話題が移ってゆく．園芸家の著書とは一味ちがったバラの本である． （金井弘夫）

□柏岡精三，荻巣樹徳（監）：**絵で見る伝統園芸植物と文化** 16＋278 pp. 1997. 発行者：柏岡精三．非売品.

電気事業を社業とする（株）関西テック（大阪市北区中之島6-2-27. TEL. 06-448-5711）の創業者が，兵庫県山崎に荻巣樹徳氏（王立園芸協会ヴイーチ賞受賞者）の協力で，日本の伝統品種一千余点を集めた花菖蒲園を造った．園内に伝統植物研究所を設立し，わが国独特の園芸植物の品種の収集維持につとめるという．本書はその中から60種類を選び，今に残る品種の写真，図譜，絵巻，絵画，絵草子，道具類の絵，衣服の文様などをカラーで記録し，解説をつけた豪華本である．解説は主に由来，鑑賞，その後の三つの見出しから成る．由来ではその植物の原産，野生にはじまり，江戸時代におよぶ品種の変遷を記す．時代ごとの品種数の表がついている．鑑賞ではその植物の着眼点，評価法についてのべる．その後では明治以降の盛衰が記述されているが，戦前はともかく，敗戦後の経過は盛衰よりは絶滅の記述の方が専らなのは気が滅入る．再評価の機運が興っても，新たに野生品から昔の変化を見いだそうとするのでは，賽の川原さながらである．歴史のある植物園が保持していた筈の品種群で，最近は話題にのぼらなくなったものも少なくない．私立の機関のこのような努力を，国公立植物園などはどう見ているのだろうか．種類ごとの参考文献が巻末に，学名を付した品種名のリストが別冊としてある． （金井弘夫）

江戸時代に発達した日本の園芸植物は世界に類を見ない独特なものである．本書はその文化的意義と保存を目的として書かれたものである．今までサクラ，ツバキ，ツツジ等，個々の植物について書かれたものはあるが，全体の植物についてまとめられたものは初めてである．ツバキやツツジなどよく知られているもの以外にもタンポポ，ボケ，ナデシコ，サイシン，セキショウ，ホトトギス，ツワブキ，ナンテン，ヤブコウジなど，一般にあまり知られていないのも含めて33種類の植物の園芸品が紹介されている．本の分量の制約から，それぞれの品種を詳しく紹介することは困難で，主にそれぞれの植物の発達の由来に力がそそがれている．江戸時代の文献を引用し，それにある図を多数載せ，普通には見ることのできない文献も載せられていて意欲的な内容である．本草図譜など江戸時代の文献から引用された植物や，風俗，植物をあしらった着物などのきれいなカラー写真があって楽しませてくれる．

品種の解説がほとんどないのはやむをえな